

時代小説と江戸・深川⑥

深川ゆかりの作家たち

江東区深川江戸資料館

江東区には、この地に住み、この町を舞台に作品を描く多くの時代小説の作家たちが活躍しています。深川は様々な時代小説の舞台として描かれ、悲喜こもごも、いろいろな場面が展開し、読者を“深川”に誘います。今回は主な深川ゆかりの作家たちと、その作品を紹介します。

1. 宮部みゆき ～“深川”を舞台に時代を超えた庶民の日常を描く～

(1) 四代続く深川っ子

宮部みゆき《昭和35年(1960)～》は「ここ(深川)を離れたら物書きとしての根っこがなくなってしまう」〈宮部みゆき・室井滋対談『チチンパイパイ』〉と語る、四代続く深川っ子です。

時代小説、ミステリー、ファンタジーなどの幅広い作品を生み出す宮部みゆきは、数多く地元江東区、下町を舞台に作品を描いています。時代小説では本所深川を中心に『あやし』『居眠り心中』には、江戸の外れにある荒涼とした場面で深川の先にある大島村を描くなど、地元ならではの土地勘を作品に活かしています。さらに直木賞受賞作のミステリー『理由』では、バブル崩壊後の不動産競売に関わる事件を取り上げ、江東区の簡易旅館片岡ハウスに一家四人殺人事件の容疑者が訪れたことから話が展開。時代を超えた日々の庶民生活の中に存在する魔を描いています。

(2) 宮部みゆきが描く深川

深川北町(架空の町)の鉄瓶長屋の住民たちの身辺に起こる事件を描いた『ぼんくら』は、本所深川方の同心・井筒平四郎や長屋の煮売り屋・お徳をはじめとした住人たちの暮らしの中で展開する事件を温かく描いています。

『本所深川ふしぎ草紙』では、本所七不思議として言い伝えられている「片葉の葦」、「送り提灯」、「置いてけ堀」、「落葉なしの椎」、「馬鹿囃子」、「足洗い屋敷」、「消えずの行灯」を、人の心に潜む闇として静かに綴っています。この作品の舞台を訪れた感想と地元深川への想いをエッセイ『平成お御徒日記』「いかがわしくも愛しい町、深川」の中で、次のように述べ



『ぼんくら』宮部みゆき著 平成12年(2000)
講談社文庫 画像提供 講談社

ています。「町が創造的なエネルギーを持つためには、なんらかの形でいかがわしさを内包していなければならないもの、と思います。(深川から)出ていきたいと思うほど、いかがわしく、卑俗で、でもどうしようもなく愛しい町。」また区内のお勧めスポットとして当館を紹介しています。

2. 山本一力 ～人々の真心を描く～

(1) 深川を一行でも描く

高知県生まれの山本一力《昭和23年(1948)～》は14歳で上京し、旅行代理店、広告制作会社勤務などの様々な仕事、商売につき、その経験を作品につなげて、時代を超えて不変的な庶民の真心を描いています。当初、格別の意識もなく江東区に移り住んだ山本一力でしたが、現在は「どういふ物語の展開になっていこうか、なかにたとえ一行でも深川が出てくるようにと思いながら、筆を進めております」〈講演「江戸下町に学ぶ生きる知恵」〉と深川への深い愛着を語っています。時代小説の新人賞さらに直木賞も深川に住んでからの受賞です。また藤沢周平の『橋ものがたり』から、深川の川と橋がある風景が故郷である高知城の城下町と重なると言い「間違いなく深

川の地べたは江戸のころとつながっている。両足でしっかりと地べたを踏ん張れば、足元から江戸が伝わってくるはずだ」〈『藤沢周平 心の風景』〉と述べています。

(2) 山本一力が描く深川

山本一力には、富岡八幡宮前の蓬萊橋^{ほうらい}にある損料屋を描く『損料屋喜八郎始末控え』や、『深川黄表紙掛取り帖』、『深川駕籠』など、深川ゆかりの作品が数多くあります。

直木賞受賞作『あかね空』は深川蛤町(現・門前仲町一・二丁目)から富岡八幡宮門前に移り豆腐屋を営む永吉・おふみ夫婦と、その家族を中心に、深川の季節感や人々の生活場面が細やかに描かれています。『辰巳八景』「永代橋帰帆」では深川佐賀町の蠟燭屋大洲屋、「洲崎の秋月」では辰巳芸者の心意気など深川を代表する風景を舞台に、この地に暮らした商人や職人、女性の生き様を愛情あふれる視点で綴っています。また老舗眼鏡屋・村田屋の長兵衛が天眼鏡で謎を見通す『長兵衛天眼帖』には木場などが登場します。さらに現在、故郷である土佐から、かつて江東区北砂にあった土佐藩下屋敷に住んだジョン万次郎の生涯を描く『ジョン・マン』を執筆中です。

3. 深川を描いた女流作家たち

戦後、時代の流れと共に、数多くの女流作家が登場し、女性の視点による新しい時代小説が生まれました。その中でも深川を舞台にした数多くの作品があります。

池波正太郎などと共に長谷川伸の門下であった平



『長兵衛天眼帖』 山本一力著
挿絵 いずみ朔庵画
画像提供 いずみ朔庵
(『小説 野生時代』平成26年8月 角川書店)

岩弓枝《昭和7年(1932)～》は昭和49年(1974)から30年以上に亘るベストセラー『御宿かわせみ』の舞台を大川端(隅田川)にある旅籠「かわせみ」と、その対岸にある佐賀町の蕎麦屋・長寿庵などを舞台に情感豊かに隅田川の両岸を描きました。永年の功績により、平成28年(2016)文化勲章を受章しました。

北原亜以子《昭和13年(1938)～平成25年(2013)》『深川滲通り木戸番小屋』では、深川中島町(現・永代一・二丁目)を舞台に、町木戸番である笑兵衛・お捨夫婦を中心にした、なにげない町を行きかう人々とのつながりや縁を優しい視点で描いています。また宇江佐真理《昭和24年(1949)～平成27年(2015)》『髪結い伊三次捕物途話』は捕物帳に恋愛小説の要素を加味した作品で辰巳芸者お文が登場します。

4. 江東区に住む作家たち

江東区大島在住の西條奈加は、近未来の日本に鎖国状態の「江戸国」が出現し、そこで事件に遭遇する大学生・辰次郎を主人公にした、新しい発想の江戸ものファンタジー作品『金春屋ゴメス』でデビューします。また金貸しを描く『烏金』の謝辞の中では、作品の着想を深川江戸資料館の展示室から得たと記しています。

江東区新大橋に住む牧秀彦は、メーカー勤務の後、時代小説作家を志すために深川に移りました。自らたしなむ居合道から『深川素浪人生業帖』などの剣豪物を主に執筆。江東区森下に住む誉田龍一は、学習塾講師の後、本所七不思議を題材にした『消えずの行灯』でデビューします。

このように数多くの作家たちが深川に住み、また訪れ、深川を舞台にした時代小説を生み出しました。作家それぞれの視点で江戸の中心部の対岸に当たり、江戸とは異なる深川独特の景観や深川を行きかう様々な人々の出会いや別れを温かく、情感豊かに作品に綴っています。光と影の両方の側面を持つ深川ならではの魅力は、これからも多くの時代小説の中に描かれ、読み継がれ、物語られていくことと思います。

(主な参考文献)

歴史と文学の会編「宮部みゆきの魅力」

(勉誠出版/2003)

山本一力ほか著「藤沢周平 心の風景」

(新潮社/2005)

宮部みゆき著「平成お散歩日記」(新潮社/2008)